

発見! おごおり遺産

No.6 国境石と国界標

前回までは、「旅人と道」をテーマに、市内に残る近世の街道を中心に紹介してきました。今回からは、市内の貴重な石造物に注目します。身近に残る歴史の証人を探してみてください。



本文中の石造物の位置図



③夜須御原郡境石から延びる国境を表す溝



④筑前筑後國界標



①三國境石

市 内には、中世から近世の石造物が多く残されています。境界を表す石、信仰を集める石など、内容はさまざまです。その中から、今回は国境を示す石を紹介します。

希みが丘団地の麻生学園小学校北側の山の上にあるのが、「三國境石」①です。これは文字通り筑前・筑後・肥前の三国の境を表す石で、この地理的特徴が、「三国」の名前の由来にもなりました。この石は、文化2年(1805)に建てられた高さ127センチ、直径28センチの円柱で、三方に「三國境石」と彫られています。土台の石には3か所の四角い穴が空いていますが、当初はここにそれぞれの国の標石が建てられていました。なお、この石から約70メートル南東には「筑後国境石」、約60メートル北東には「筑前国境石」があり、当時の国境ラインが分かります。

現在の小郡市、大刀洗町、筑前町の境界付近にも国境石②があります。建てられた時期は不明ですが、「従是(これより)北東筑前領」と彫られていることから、筑前側が設置したことが分かります。

花立山麓の日子神社からや山道を登ったところにあるのが、「夜須御原郡境石」③です。なお、この境石から南東側の城山堤まで、長さ約150メートルの直線の溝が延びており、これも国境を表す境溝であると考えられます。

明治に入り、津古村(筑後国御原郡)と隈村(筑前国御笠郡)との境に建てられたのが、「筑前筑後國界標」④です。現在の小郡市と筑紫野市の境に5基残っています。この標石の設置経緯が、「筑前筑後両国々界問題」(国立公文書館所蔵)に書かれています。これによると、江戸時代には周辺は山地で、明確な国境が定められていなかったようです。明治時代になり、地券発行と地租改正のために明確な土地の境が必要となり、三潅県(小郡市側)と福岡県(筑紫野市側)、さらには内務省との協議により、明治9年(1876)に境界の確定が発表されました。周辺は現在も宅地開発が進行中で、貴重な文化遺産をどのように守り伝えるか、協議が続いています。

問合せ先 文化財課 ☎75・7555

おごおり遺産とは?》》近年の市内調査で「再発見」した文化遺産＝市民のたからのこと